



江華島事件から日韓併合、そして終戦：相剋を生んだものとは

木村, 幹

(Citation)

歴史街道, 379:38-45

(Issue Date)

2019-10-06

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006525>



江華島事件から 日韓併合、そして終戦 相剋を生んだものとは

近現代史における日朝関係は、そうごく相剋の連続といつていい。カンファド江華島事件、日韓併合、そして戦後……。朝鮮半島の視点で考えると、その原因が見えてくる。

Kimura Kan

木村 幹

●神戸大学大学院国際協力研究科教授●

PROFILE 昭和四十一年（一九六六）、大阪府生まれ。京都大学大学院法学研究科修士課程修了。博士（法学）。専門は比較政治学、朝鮮半島地域研究。著書に「朝鮮半島をどう見るか」「高宗・閔妃」「朝鮮／韓国ナショナルリズムと「小国」意識」「日韓歴史認識問題とは何か」などがある。

距離感覚、 事大主義、 情報ルート…

日本と朝鮮半島の近現代史を語る前に、いくつか押さえておきた

いことがある。

東京と、韓国の首都・ソウルとの直線距離をご存じだろうか。

およそ千キロメートルだが、実はソウルと中国の首都・北京ペキンの間も、だいたい同じくらいになって



いる。

朝鮮半島の歴史を考えるうえで、この距離感覚は認識しておいたほうがいだろう。

朝鮮王朝の都も、当時漢城府ハンショフと称したソウルで、中国の王朝である明ミンと清シの都も、北京であった。

ソウルから見れば、東京は海で隔へだてられているのに対して、北京は陸続きである。そのような場所に、超大国の都があるのだ。しかも当時の国境線からソウルまでは、三五〇キロメートルほどしかない。

これは東京でたとえるならば、北京が長崎あたりにあって、国境が琵琶湖あたりにあるようなものだ。朝鮮王朝がいかに厳しい地政学的条件に置かれていたかが、わかるだろう。

そもそも朝鮮半島の王朝には、中国は常に「大国」であり、それとくらべると、朝鮮は自国の軍事力だけでは国を守れない「小国」である、という認識があった。

ただこれはあくまで、中国との対比として「小国」とみているの

であり、朝鮮から見れば、日本も同じ「小国」とみなされていた。

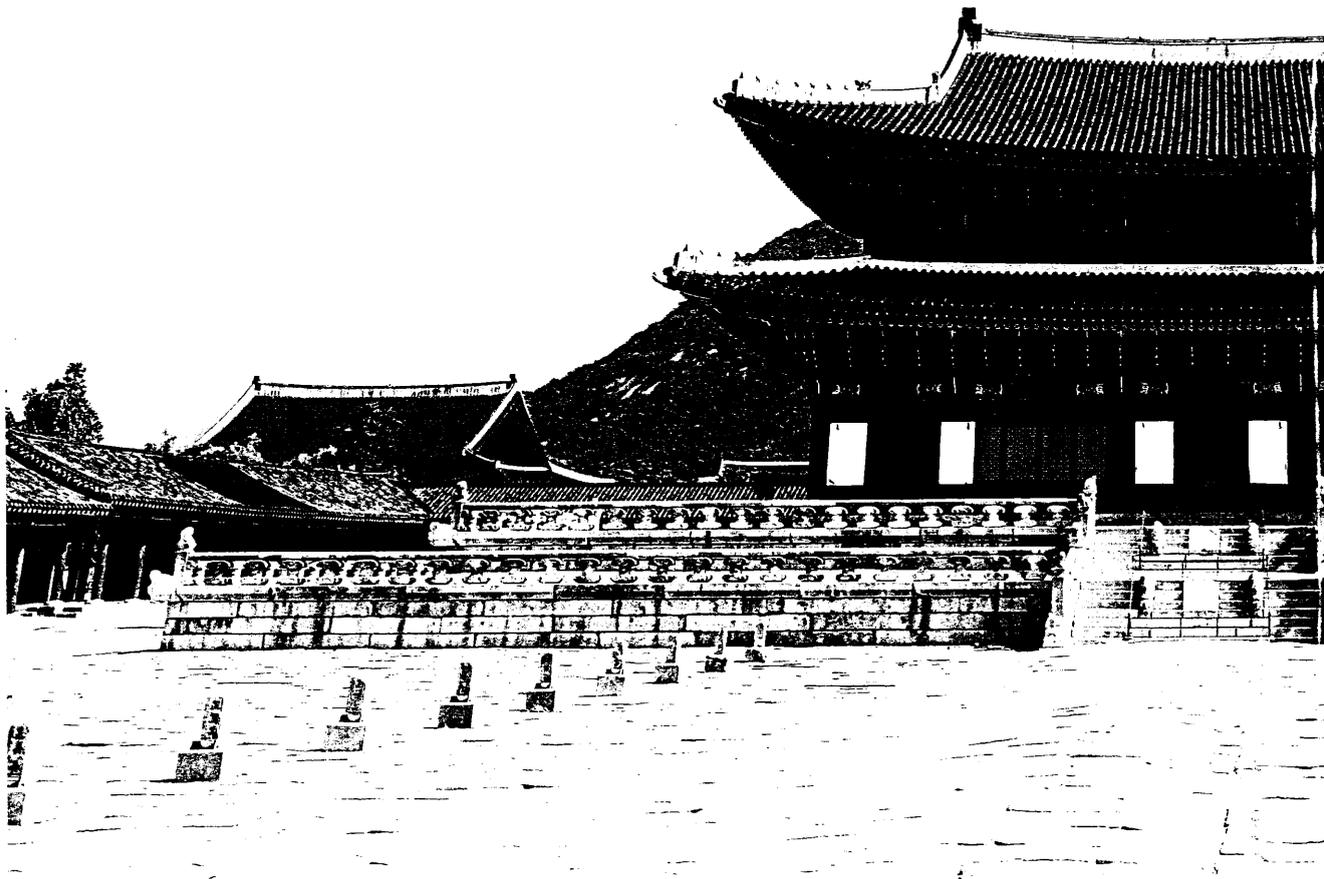
それに対して幕末の日本人は、日本を中国と同格の存在とし、朝鮮を格下とみていた。この中国に対する考えと、自国の位置に対する理解の相違が、近現代における両国の歩みを変えていったといえる。

自らを小国とみる朝鮮王朝は、十四世紀に明に従属し、明の皇帝を世界で唯一の皇帝と認め、そのかわりに、自らは国王として冊封さくほうされる道を選んだ。

中国の冊封体制下に入るといっても、朝貢使節ちゆうこんしせつを送る以外に特段の干渉かんしやうがあるわけではなく、その分、軍事的な安全保障を得られるという利点があったからだ。

明が衰えて満州族まんしゅうの清が台頭すると、朝鮮王朝はその軍事力によつて徹底的に打ち負かされてしまふ。一六三七年、朝鮮国王は額めだを地につけて、謝罪することになった。

朝鮮王朝は、満州族のほうが文



朝鮮王朝の王宮である景福宮の勤政殿(写真:アフロ)

化的に後(おそ)れてみるとみていたために、心から屈服(くつぷく)したわけではなかった。しかし、軍事的に対抗することは完全に諦(あきら)め、やはり従属することを選(えら)んだ。

もつとも先述したように、中国の王朝に従属すれば、安全保障はしてくれる。中国の王朝とは戦わないという姿勢を徹底することで、朝鮮王朝は二千万人近い人口を中国に併吞(へいどん)されることなしに守ることに成功したといえる。

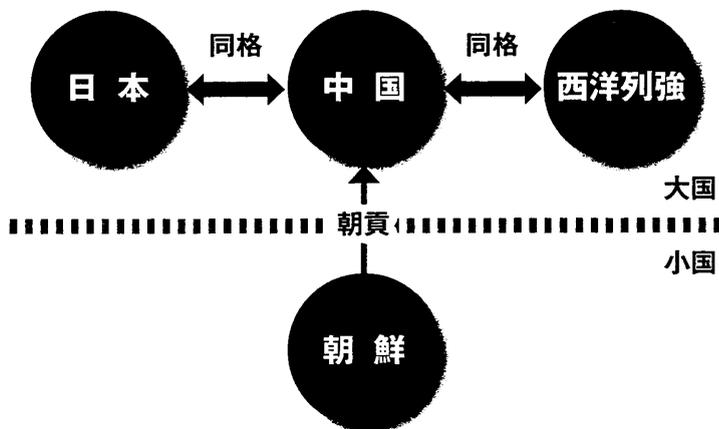
そうした朝鮮王朝の外交姿勢は、「事大主義」といわれる。自分が「小国」であることを前提とし、小国だから「大国に事(つか)えるしかない」とする考え方だ。だが隣国に大国があれば、むやみにこれに敵対するのはナンセンスだから、そうした姿勢になるのは、ある意味で合理的な選択といえる。

朝鮮王朝を考えるうえで、もうひとつ押さえておきたいことがある。

それは、外国からの情報ルートが、実質的にひとつ、つまり清か

伝統的世界観の違い

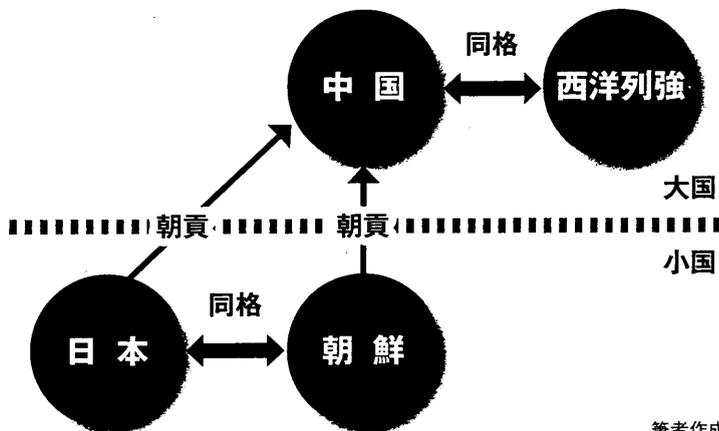
日本人の世界観



らのルートしかなかったということだ。

日本に朝鮮通信使を派遣していただではないか、と思われるかもしれない。しかし、派遣されたのは十数回で、最後は幕末よりだいたい前の一八一一年だった。だから朝鮮通信使に、日本を通じて世界情

朝鮮／韓国人の世界観



勢について情報を得ることを期待するのは無理がある。

それに対して日本は、鎖国してあるとはいえず、世界に開かれた四つの「窓」があった。出島(でじま)のオランダ商館(りやうかん)、琉球国(りゅうきゅうこく)、そして北海道の松前藩(まつまえはん)と、朝鮮との交流を担(た)う対馬藩(つしまはん)である。

この情報ルートの多少が持つ意味は、一八四〇年に清とイギリスのあいだで起きたアヘン戦争によって浮き彫りとなる。

日本はアヘン戦争の情報をオランダから得て、それは天保(てんぽう)の改革にも活かされた。一方、朝鮮王朝は清に使者を派

筆者作成

遣するが、「大丈夫だ」といわれるばかりで、一八五六年に清が英仏と戦った第二次アヘン戦争（アロー戦争）の際にも、同じような返答を得るだけであった。

清としては朝貢国を不安にさせないよう、当然の対応をしたままだろうが、結果として朝鮮は、国際情勢に関わる正確な情報を得ることができなかつた。そのことが、朝鮮王朝のその後の選択に影響を与えたのは明らかだ。

近代主権国家と冊封体制の衝突……

こうした前提を踏まえ、たうえで、近代以降の日本と朝鮮王朝の歩みを辿っていこう。

一八六八年、明治維新によって近代主権国家としての道を歩み始めた日本は、朝鮮王朝と国交を結ぼうとする。

しかし、朝鮮王朝はこれを拒絶する。国書に「天皇」とあったため、冊封体制下であり、清の皇帝

を唯一の皇帝とする朝鮮王朝としては、認めることができなかつたからだ。

これによって、日朝関係は一時的に断交するわけだが、日本にも言い分はあつた。近代主権国家には、「主権国家はみな対等」という大原則がある。そういう近代国家からすると、清の冊封体制下にある朝鮮、琉球国、ベトナムといった国々が、こうした「主権国家」なのか判然としない。

日本が江華島事件を起こす前に、フランスとアメリカが朝鮮を開国させようと攻撃を加えているが、清に対して「あなたの管轄下の朝鮮が開国しない」と注文を付けると、清は「あれは別の国だ」と応じるようなありさまだつた。台湾で起きた事件について日本に抗議された際にも、清は「台湾は例外の地」と答えている。

こうした中、近代国家である日本としては、国境の画定と同時に、冊封体制下の国々の位置づけを明確にしていく作業が必要になつた。

その過程で起きたのが、一八七五年の江華島事件である。日本はこれを機に、朝鮮を開国させ、日朝修好条規には「朝鮮は独立国」という一文を入れさせた。

江華島事件前、日本は一八七二年に琉球国を廃して琉球藩とし、一八七九年に沖縄県を置くことで、完全に併合している。一八七四年には台湾に出兵しているが、これも沖縄の領有を確定する中で生まれたものだ。

だが清としては、こうした日本の動きは看過できない。朝貢国を守れなければ、清国皇帝の正統性が揺らいでしまうからだ。

そこで清は、日本を牽制するために、朝鮮王朝の国王・高宗に対して、西洋列強に開国したうえで、何か事が起こつた際には清の命令に従うべきだと圧力をかける。

こうして朝鮮王朝は開国することになるのだが、高宗の政策に不満を抱く勢力が出てくる。彼らは、当時失脚して、政権を取り戻そうとしていた高宗の生父・大院

君と結びついていく。

その結果起きたクーデターが、一八八二年の壬午軍乱である。反乱の成功によって、大院君は王宮に入つて政権を取り戻す。しかし、日本公使館を襲撃することを容認していたことから、日本人にも死者が出た。

このような混乱した状況の中、一部の朝鮮の人々は日本と清に出兵を要請する。先に朝鮮に到着したのは清のほうだつた。清はまたたくまに大院君をとらえて天津へと拉致し、そのままの勢いで反乱軍を鎮圧した。

この事件で何より重要なのは、これにより清軍が漢城府に駐屯することとなり、朝鮮王朝がその強い圧力下に置かれたことだつた。

注意しないといけないのは、このような状況は中華帝国と朝貢国の関係においてすら「異例」のことだつたことだ。つまり、これまでは形式的に中国に従属しても、実質的には内政面での自由を謳歌していた朝鮮王朝にとって、戦時

でもないのに中華帝国の軍隊が駐屯し自らを圧迫するというのは、過去になかったことであり、「それは約束が違う」という不満を抱く人々が出てくる。

その一つのグループが金玉均キムユンを代表とする「日本党」と言われた人々である。彼らは、日本を近代化のモデルとし、日本の支援を求めようとして、清国の力を利用して改革を進めようとする「清国党」と対立する。

この時点で、日本党が軍事力として期待できるのは、日本しかない。そして日本党は日本の力を借りて、クーデターを起こす。

それが、一八八四年の甲申政変こうしんである。日本党と日本軍は、一時は王宮を占領する。しかし、それを容認できない清軍の攻撃にあり、あっさりと敗退してしまふことになる。この時点での朝鮮半島における日清両国の軍事力には大きな差があったからである。

これにより、朝鮮王朝に対する清の影響力はさらに強まることと

なった。そうすると、朝鮮王朝内で、清に対する不満はますます高まることとなる。

この不満に拍車はくしゃをかけたのが、清軍を指揮する袁世凱えんせいがいであった。清国皇帝の代理人として、朝鮮王朝よりも上位の存在であるかのように振る舞う袁世凱は、高宗にすれば自らの権威を損なう憎むべき存在だった。

だからこそ高宗は、このままでは本当に国がなくなってしまうという危機感を抱いた。しかし清を牽制するにしても、敗れたばかりの日本をあてにすることはできない。

そこで選択肢として出てきたのが、ロシアだった。高宗はロシアを引き込もうと、二度にわたって密約をむすぼうと試みた。大事なものはこれが朝鮮王朝の主體的選択だったことだ。つまり、彼らは自らが外国を引き込むことで、自らの独立を守ろうとしたことになる。しかしこの時点では、ロシアに清と全面衝突するほどの余裕はな

かった。清はまだ力があるとみられていたし、物資を東アジアに送るためのシベリア鉄道も完成していなかった。

結局、密約は成立せず、清は西洋列強を引き入れようとする高宗の動きを警戒し、さらに圧力を強めることになった。ここにおいて、朝鮮半島における清の覇権が一時的に確立される。

朝鮮王朝からすれば、壬午軍乱で清軍をソウルに引き入れた後、その影響力を排除しようとして、日本、ロシアを頼ろうとしたものの失敗し、そのたびに、清の覇権を強める結果となったのである。

日露戦争から 日韓併合へ

こうして清の覇権のもと、朝鮮半島に一時的な平穏が訪れる。しかし、民衆の間に外国勢力への反感が高まり、一八九四年に東学党とうがくの乱が起きる。

焦った高宗は、鎮圧のために清

に派兵要請をする。それに対抗するかたちで日本が出兵し、朝鮮王朝の思惑おもわくをこえて、朝鮮半島を舞台として日清戦争が勃発はつぱつすることとなる。

勝利したのは日本だが、注意しなければいけないのは、これによって日本の覇権が確立されたわけではないことだ。

戦後、日本はロシアを中心とする三国干渉によって、日清戦争で得た遼東半島を、清に還付かんぷすることとなった。これをみた高宗は、日本は恐るるに足らずと判断し、日本から背を向け始める。

そこで現地の日本公使館が、日本への反対勢力の中核とみなした高宗の妻・閔妃ミンヒを殺害し、事態は逆になります悪化した。

すると高宗は、日本の圧力から逃れるために、自ら家族と共にロシア公使館へ逃げ込むという思い切った手に出る。

つまり、ロシアを引き込むことで、パワーバランスを拮抗きつこうさせようとしたのだ。こうして高宗は、



高宗 (写真: 近現代PL)

一八九七年、国王から皇帝となり、国号を大韓帝国とする。朝鮮史上、皇帝を称するのは初めてのことであつた。

ただ日本は、ロシアが朝鮮半島に影響力をおよぼすのは、防衛上の脅威だと考えた。対するロシアにしても、満州まで影響力を及ぼしかねない日本の存在は愉快ではなかつた。

かくして一九〇四年、日露戦争が勃発し、大方の予想を覆して、日本が勝利する。この戦いによって、日本は朝鮮半島の覇権を確立し、列強もそれを認めることとなつた。ようするに、高宗がどこかの国を引き入れて日本に対抗しようにも、そのような国もない状態となつたのである。

たとすれば、日露戦争前のアメリカがだつたらうが、当時のアメリカはフィリピンとハワイをおさえたばかりで、真珠湾にはまだ軍港が存在しなかつた。アメリカが太平洋において日本に対抗するのは難しく、だからこそ日露戦争の講和を仲介する立場となつたといえる。高宗は最後の賭けとして、一九〇七年にハーグ平和会議に密使を

派遣して、日本の圧力を訴えようとするが、列国からは参加すら認められなかつた。

そして一九一〇年、日本は大韓帝国を併合するわけだが、それはある意味では、ポーツマス講和条約の必然的結果だと言えた。

言い換えれば、西洋的近代秩序が徐々にアジアに浸透し、彼らの世界観に合わせて「整理」されていく。その力は、香港、日本へとおよび、最後に行きついたので、朝鮮半島だつたということになる。

朝鮮王朝がこの流れに抗えなかつたのは、結局、独自の軍事力を養成できなかつたからだ。清の冊封体制下にあつたころは、北からの脅威は中国との関係さえ安定していれば心配する必要はなかつた。徳川幕府とも交隣関係にあり、南も安全だつた。だから、自前の大きな軍事力を持つ必要がなかつた。

一方で近代化の波が訪れた時、軍事力を持つとうとしても、朝鮮王朝にはそれを実現するための財政的基盤も、社会的基盤も存在しな

朝鮮半島をめぐる、 江華島事件から日韓併合までの流れ



かった。

そもそも、朝鮮半島の国が、中国に対抗できるだけの軍事力を持つようとするのは現実的ではない。だからこそ、朝鮮王朝は自らを守つてくれる国を探し続けたのであり、彼らにとってそれは、合理的な選択だった。ただ、その頼るべき大國が存在しなくなった時、彼らは日本にのみ込まれることになった

わけである。

イギリスとインドは「物語」を終えたか…

こうして日韓併合へといったつたわけだが、日本の朝鮮半島統治については、様々な見方がある。「肯定的」な観点から、経済成長をもたらしたなどとして、西洋列

強の植民地支配より「よい」とするもの。

「否定的」な観点から、労働者や「慰安婦」を動員したとして、西洋列強より「悪辣」とするものなどである。

総じて見ると、日本の植民地支配は、西洋列強のそれと大きく異なっていたわけではない。

何より重要なのは、朝鮮半島や

台湾には大日本帝国憲法すら施行されず、そこに住む人々の権利義務関係が、日本に住む人々より大きく劣っていたことだ。

同化政策をとり、「日本人と一緒にだよ」といつつ、実際には同じ権利を与えないのだから、明らかな矛盾といえる。だからこそ、その統治が現地の人々から歓迎されなかったのは当然のことといえよう。

朝鮮半島の人々にフラストレーションを残したのは、それだけではない。「支配の終わり方」も、彼らにとっては問題だった。

一九四五年、連合軍に敗れた日本が撤退した結果、朝鮮半島の北緯三十八度線を挟んで、北をソ連軍が、南をアメリカ軍が占領することとなった。

それは見方を変えれば、朝鮮半島の人々が自力で日本支配を打ち破り、自らの独立と民族のプライドを回復する貴重な機会が失われたことを意味する。

それに対して、他の多くの植民地では、民族運動が展開され、この運動に勝利することで、宗主国からの独立を果たした。

イギリスとインドの関係は、その典型だ。そして独立に向けた最終局面では、次のような場面があった。

初代インド首相となるネルーらインド議会の代表団が、インド総督マウントバッテン卿のもとを訪れ、独立インドの初代内閣を構成

する閣僚名簿を手渡す。するとマウントバッテンは、杯をあげ「インドに！」と乾杯し、ネルーは「ジョージ六世に！」と乾杯したのだ。敵対関係にあった両者が一堂に会することで、植民地支配という「物語」が終わったことを確認したのである。

しかし、日本人と朝鮮半島の人々にそのような場面は訪れず、独立運動の「物語」は未完に終わることとなってしまった。

それゆえに、朝鮮半島の人々の民族的フラストレーションが払拭される機会は失われ、その鬱憤は失われたラストシーンを求めて、今なおさまよい続けることとなっている。

現在にいたるまで、日本と韓国が「過去」の問題をめぐることで、これが続いている最大の原因は、この一点にあるといってもいい。

日本と朝鮮半島の戦後の関係は、最初の段階から、ボタンを掛け違えてしまっていたのである。